
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 370 号

—環境・農業・食べ物など情報の交流誌—

2014.09.11（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

<http://www.yamazaki-i.org>

*****発行部数 1063 部*****

□ 目 次 □-----

<巻頭言> 無秩序な開発と広島のと砂災害に思う 渡邊 博

<山崎農業研究所総会記念フォーラム（速報）>

テーマ：山崎記念農業賞受賞者に学ぶ

日時：2014年7月26日（土）13:00～17:00

1. 経過と評価.....事務局長・小泉浩郎氏

<お知らせ 1> 山崎農研編「平成のマドンナ」シリーズ No.8 完成しました

<お知らせ 2> 山崎農業研究所所報『耕 No.132』発行されました

<編集後記> 優先さるべきはワールドでなくコスモス

<巻頭言> 無秩序な開発と広島のと砂災害に思う

頻繁に発生している自然災害の中でも、今回の広島のと砂災害に限っては、なぜこのような場所に住宅密集地が形成されていたのだろうかという点でおどろきであった。気候変動による異常気象が引き起こした災害であることは疑いないものの、開発してはいけない場所に踏み込んでいったという点では人災であったと言わざるを得ない。

日本では都市と農村の境界が非常にあいまいである。都市が膨張するときは、まず都市近郊農地を蚕食していく。そのため優良農地の多くがただちに浸食、分断され、都市機能も農村機能も極めて非効率な空間が形成されてしまう。都市計画法（昭和43年）や農業振興法（昭和44年）によって、無秩序な土地利用が多少なりとも抑制されるようになったものの、その後のバブル景気や都市への人口流入の増大はこれらの法律の実効性に大きな圧力となったことは否めない。

それでも無秩序に拡大する都市の膨張に対する問題意識や農業への関心の高まりから、都市と農村の間の整序ある土地利用への要求は大きくなり、少なくとも平場の農村地域での無秩序な開発は大きく規制されるようになってきた。そうすると、皮肉なことに平場の農地を飛び越えて条件の悪い山際の農地や山そのものが都市開発のターゲットにされるようになった。経済至上主義下では、安かろう悪かろうの土地開発が平然と行われてきたのである。日本全国で見られる土砂危険区域の宅地の多くは、こうした無秩序な土地利用開発の結果生み出されてきた地域だといえる。

広島土砂災害は「土砂災害危険区域」に指定されている区域で発生している。しかし指定区域（特別警戒区域）であっても、適当な手段を講じれば、「特定開発許可」に基づいて開発は認められるのである。確かに土木工学的対応によりある程度の災害リスクは低減させることは可能であるかもしれない。しかし、今回発生した土砂崩れは、テレビ映像などから見る限り、明らかに深層地滑り崩壊である。深層地滑り崩壊は、生半可な土木的対応ではとても防ぎきれない。ひょっとしたら不可能かもしれないと覚悟した方がよい。

広島の場合、深層崩壊は想定されていなかったのかもしれないが、開発当事者の心のどこかに東北地方の津波と同じように「想定外」であったとして自己弁護の気持ちが働いたとしたら看過できない。経済と開発を満身にコントロールできない人間が自然をコントロールなどできるはずがない。

我が国は、古来より地震、津波、台風、洪水と付き合ってきた。やまたのおろち伝説は、暴れ川を擬人化したものだ。先人は、危険な場所を蛇や竜に例えたり、荒川、荒浜など、自然災害を連想するような地名を残して危険を後世に伝えてきたのだが、近年は合理化という名のもとに町名変更が頻繁に行われ、災害文化までも消し去られようとしている。

今日、国土の安全を脅かしているのは、国土利用の稠密化とその裏返しである過疎化である。いまあらためて注目すべきはかつての分散型土地利用ではないか。

渡邊 博

山崎農業研究所事務局長

yamazaki@yamazaki-i.org

<山崎農業研究所総会記念フォーラム（速報）>

日時：2014年7月26日（土）13:00～17:00

場所：東京都新宿2丁目19-1ビッグスビルB21会議室

テーマ：山崎記念農業賞受賞者に学ぶ

1. 経過と評価.....事務局長・小泉浩郎氏

2. 在来品種を磨く

（第33回（2008年）受賞）野口種苗研究所代表・野口 勲氏

3. 家族農業経営を守る

（第13回（1987年）受賞）元船橋農産物物産センター・斉藤敏之氏

4. 耕してこそ農業

（第36回（2012年）受賞）福島県有機農業ネットワーク理事・大河原 海氏

1. 経過と評価.....事務局長・小泉浩郎氏

●山崎農研の歩み

「現場に学び現場と共に」を理念として40年間を振り返ると、研究所報発行、定例研究会、山崎記念農業賞の表彰、会員との交流メルマガ「電子耕」、その他様々な活動を通して農業・農村のための活動をしてきた。第1回から今年で第38回となる。

●受賞者の横顔

受賞者には個人（内女性5）の他3夫婦、1家族、その他に数団体が含まれる。領域は著作、文化活動、技術・農法、教育・普及、地域作りに大別される。第1回の菱沼達也氏は山崎不二夫先生と共に農研の思想的基盤を造った。第11回には宇根豊氏（虫見板での減農薬稲作）、第21回には古野隆雄・久美子ご夫妻（合鴨水稲同時作）、第28回の宮古農林高校環境班（土着菌と地域資源を活用した有機肥料）などなど、多くのすぐれた成果、そのロマンチズムにたいし、賞の贈呈がなされた。（詳しくは耕133号参照）

●新たな出発

これからも創設の原点に立って、風土を生かした多様な農業・農村、地産地消、住民主体の地域作り、さまざまな産業交流、地域交流などを通して、受賞者に学び農業・農村の発展に寄与して行きたい。

（文責：安富・田口）

<お知らせ 1> 山崎農研編「平成のマドンナ」シリーズ No.8 完成しました

安倍改造内閣が誕生しました。最多の女性閣僚 5 人を登用、成長戦略の中核「女性が輝く日本」のシンボルとしました。数合わせではなくその実力に期待したいところです。

改造内閣の目玉に「地方創生」があり、次期総理のライバルとされる石破氏が新大臣となりました。農業・農村の活力を示す指標の多く（人口、農業所得、担い手、食料自給率等）は右肩下がりです。その中で農村女性起業、農村女性の社会進出は、堂々と右肩上がりが続けています。「女性の元気は地域の元気」と地域活性化の原動力です。

山崎農研編集「平成のマドンナ」シリーズ No.8(B5 版・30 ページ) が完成しました。既発行分も含め、電子版あるいは冊子で頒布しています。送料込み 500 円です。ご希望の方は yamazaki@yamazaki-i.org までご連絡ください。

(新刊)

No.8 家族経営協定でいきいき人生にトライ

栃木県那須塩原市

酪農・教育ファーム・レストラン 人見みみ子さん

(阿久津加居聞き書き)

(既刊)

No.1 都市近郊に「オアシス牧場」を

埼玉県上尾市 榎本美津子さん (小井川敏子聞き書き)

No.2 世羅高原のそよ風になりたい

広島県世羅町 井上幸枝さん (後由美子聞き書き)

No.3 むらにまちに子どもたちにふるさとの味を伝えたい

鳥取県鳥取市 西山徳枝さん (小泉浩郎聞き書き)

No.4 働きやすい作業環境の改善

徳島県 藍住地区のお母さん達 (小林徳子聞き書き)

No.5 「奥久慈の味」から広がる出会い

茨城県大子町 齊藤キヌ子さん (臼井雅子聞き書き)

No.6 デパートに進出した農村女性

栃木県宇都宮市 アグリランドシティショップ (阿久津加居聞き書き)

No.7 貧しさに学びころ豊かに生きる

群馬県嬭恋村 丸山みち子（丸山みち子著）

No.8 家族経営協定でいきいき人生にトライ

栃木県那須塩原市 人見きみ子さん（阿久津加居聞き書き）

No.9 （近刊）月に手が届く山間農家に嫁いで

高知県土佐町 和田計美さん

<お知らせ 2> 山崎農業研究所所報『耕 No.132』発行されました

山崎農業研究所所報『耕 No.133』が発行されました。

ご希望の方には雑誌を頒布（有料：1,000 円）いたします。

yamazaki@yamazaki-i.org

までご連絡ください。

■山崎農業研究所 40 周年記念

山崎農業研究所を支える力— 40 年を振り返って◎安富六郎

〈山崎イズムを現代に問う〉

- ・ 研究活動における山崎イズム◎田淵俊雄
- ・ 研究をもっと技術に生かすために◎多田 敦
- ・ 山崎不二夫先生の全人間的な研究実践に学ぶ◎熊澤喜久雄
- ・ コンサルタントと研究所◎横澤 誠

〈研究所活動をめぐって〉

- ・ 現地に学び現地とともに◎小泉浩郎
- ・ 定例研究会について◎石川秀勇
- ・ 「耕」「電子耕」単行本を通じた社会への発信◎田口 均
- ・ 研究所のこれからを考える◎渡邊 博

〈山崎（記念）農業賞受賞者はいま〉

- ・ 丸藤政吉〈第 5 回・1979 年〉現場と共に＝「農村通信」創刊 800 号
- ・ 小林芳正〈第 8 回・1982 年〉ふるさとへの想い—いまも消えることなく
- ・ 古野隆雄・久美子〈第 21 回・1996 年〉合鴨家族の 20 年

—進化し続ける合鴨水稲同時作

- ・ 鋸谷 茂〈第 29 回・2004 年〉自然の摂理に基づいた林業技術を現場で実践
- ・ 榎本牧場〈第 30 回・2005 年〉都市近郊で酪農の 6 次化をさらに展開
- ・ 大張物産センターなんでもや〈第 32 回・2007 年〉

地区民が求める「なんでもや」であり続けること

・野口種苗研究所・野口 勲〈第 33 回・2008 年〉

自然回帰の時代のなかで固定種の普及につとめる

・NPO 法人 福島県有機農業ネットワーク〈第 36 回・2012 年〉

福島の有機農業再興のために

■第 147 定例研究会 愛郷 vs 愛国—TPP 問題へのもう一つの視座◎宇根 豊
〈書評〉宇根 豊 著『百姓学宣言』／徳永光俊

<編集後記> 優先さるべきはワールドでなくコスモス

書籍の編集・制作という仕事柄か、同じ言葉（単語）を使いながら、その言葉にもりこんでいる意味がそれぞれの人・場面で異なることが多いことに感じ入ることが多い。最近、気になるのが「世界」という言葉だ。ニュースを見れば「世界」という言葉はそれこそ頻出するし、国際競争であったり、TPP などあたりまえのようにして「世界」との関連で語られる。

しかしどこかに違和感を覚えるのだ。「どこか」とは――

歴史家・渡辺京二さんの新刊『無名の人生』（文春新書、2014）におもしろい記述がある。

「私たちにとって、『世界』というのは二つあります。／一つは地理的に成り立っている世界、いわば『地理学的な世界』です。そこにはロンドンとかニューヨークとか、そういう先進的な都会があり、日本でいえば東京、横浜、京都、大阪といった都会があつて、それ以外はすべて『田舎』ということになるでしょう。田舎とって悪ければ『地方』です。／もう一つの世界は『自分を取り巻く世界』です。『自分中心の世界』といってもいい。つまり、都市であれ、村落であれ、太陽や星や月や、山や森や川に取り巻かれ、風が吹き、雨が降り、住む所を同じくする人々と交わる世界です。／ふつう、人はこの二つの『世界』をもっているものなのに、たとえば石牟礼道子さんには、『自分中心の世界』しか見えていない。〔中略〕／しかし人間にとって大切なのは『自分中心の世界』、つまりコスモスとしての世界です。いわゆる国際情勢とか世界地理は、情報として与えられるもので、それをワールドといってみましょう。われわれがふつう体験するのはコスモスであつてワールドではありません。」

いまの世間の風潮では、優先されるのはグローバルな意味での世界＝ワールド

である。しかし大事にされるべきは、より小さな世界＝コスモスでないか。たとえば、原発再稼働の論じ方として、日本経済の国際競争力のためには...という言い方がある。しかしそもそも経済とは、自分を取り巻く世界＝コスモスのためであるはずだ。

渡辺さんは同書で「私たちの日々の生を支えているのは、もっとささやかな、生きていることの実質や実感なのかもしれません。／本当に何げないもの、たとえば、四季折々に咲く花を見てほっとするような小さな感情とでもいったらいいのか.....」とも述べている。

「判断基準としての、より小さな世界の優先」。そんな見方をしたほうがよいのかもしれない。

2014年08月21日

山崎農業研究所会員・田口 均

yamazaki@yamazaki-i.org

山崎農業研究所編・発行／農山漁村文化協会発売
『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』
(発売：2008/11 定価：1,575円)

http://shop.ruralnet.or.jp/b_no=01_4540082955/

たくさんのお書評・紹介記事をいただいています。感謝・感謝です。

◎辻信一さん（文化人類学者、ナマケモノ倶楽部世話人。明治学院大学教授）
グローバルの次は何？ ～卒業するゼミ生諸君へ

<http://www.sloth.gr.jp/tsuji/library/column64.html>

◎戒谷徹也さん（大地を守る会）

ブログ：大地を守る会のエビちゃん日記 “あんしんはしんどい”

「自給率」の前に、「自給」の意味を

<http://www.daichi.or.jp/blog/ebichan/2008/12/16/>

◎吉田太郎さん（長野県農業大学校教授、執筆者）

キューバ有機農業ブログ 自給再考の本が出ました

http://pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=1822182

◎関良基さん（拓殖大学政経学部）

ブログ：代替案 書評：『自給再考—グローバリゼーションの次は何か』

<http://blog.goo.ne.jp/reforestation/e/cb22650fa39384bdd22b61440fa81fa0>

◎大内正伸さん（イラストレーター・ライター）

ブログ：神流アトリエ日記（3）「書評『自給再考』」

<http://sun.ap.teacup.com/applet/tamarin/20081204/archive>

◎ブログ：本に溺れたい グローバリゼーションの次は何か

<http://renqing.cocolog-nifty.com/bookjunkie/2009/01/post-841e.html>

◎森川辰夫さん

NPO 法人 農と人とくらし研究センター／資料情報

<http://www.rircl.jp/shiryo.htm>

◎日本農業新聞／書評

（2009/01/19 評者：日本農業新聞編集委員 山田優）

<http://yamazaki-i.org/>

（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）

◎小谷敏さん（大妻女子大学）

日本海新聞コラム「潮流」／「自給」の方へ（2009/01/31）

<http://blog.goo.ne.jp/binbin1956/e/c895f6619b30ba7725e264b4daa75219>

◎白崎一裕さん（(株) 共に生きるために）

月刊とちぎV ネットボランティア情報 vol.158／しみん文庫

<http://yamazaki-i.org/>

（画面トップの「書評はこちらから」よりアクセス下さい）

◎塩見直紀さん（半農半X 研究所、執筆者）

ブログ：半農半Xという生き方～スローレボリューションでいこう！

立国集。

<http://plaza.rakuten.co.jp/simpleandmission/diary/200812270000/>

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化

けの原因です。

次回 371 号の締め切りは 09 月 22 日、発行は 09 月 25 日の予定です。

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 370 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://archive.mag2.com/0000014872/index.html>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

<http://www.yamazaki-i.org>

2014.09.11（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:yamazaki@yamazaki-i.org>

***** ここまで『電子耕』 *****